

インターネット《中国書法江湖》の掲載文に拠ったことをお断りしておく。

- iv 丸括弧 () は白謙慎の原注, きっこうカッコ [] は河内の訳注である。また「先生」などの敬称を略して表記したところがある。
- v 傅申氏の「序説 欧米における中国書法収蔵と研究の小史」(第一巻 111 頁ー 114 頁所収)には, 白氏が引用したと思われる日本語訳文が見当たらないし, また英文 [Preface] (第一巻 巻末)にも見当たらないので, そのまま白氏の文章を訳出した。なお, 内容的に近いと思われる文章を引用しておきたい。
「主要な東洋芸術の分野のうちで, 欧米の学者や博物館の専門家にとって書法芸術がもっとも理解しがたいといわれる。そのため収蔵と研究の発展もやや遅々としている。おそらく絵画, 彫刻, 器物などは欧米の芸術にも同様にありますが, 書法芸術のみは東洋特有のものだからであろう。学書の経験によって基本的な技法やそのうちにおける楽しさ苦しさをすることもないし, 篆, 隸, 行, 草の各体についての素養もないので, みてもさっぱりわからず尻ごみしてしまう。ゆえに書法芸術と書道史の研究は, かならず中国学の水準と日本語の読解力の向上, 書道に関する欧文書籍の出版, 所蔵品の増加, 研究員の養成, さらに法書の展覧また, 書道史討論会の実行などの条件が満たされてはじめて新しい進歩がうまれ得るのである。」(111 頁)
- vi Gordon S. Barrass の著書 “The Art of Calligraphy in Modern China” 2002 年 1 月を指す。彼は 1970 年から 72 年まで北京に外交官として滞在した。
- vii 2006 年 9 月 2 日から 2007 年 1 月 21 日まで開催の特別展「Brush and Ink: The Chinese Art of Writing」を 1 月 13 日に鑑賞した。陳列作品中からクロフォードコレクションを挙げておこう。
北宋 黄庭堅 草書廉頗藺相如傳卷／南宋 高宗 草書七絶詩扇頁／南宋 楊皇后 楷書薄薄殘妝七絶團扇／南宋 楊皇后 楷書淪雪凝酥七絶團扇／南宋 理宗 行書秋深雨過聯句團扇／南宋 理宗 行書孟浩然過融上人蘭若七絶詩團扇／南宋 理宗 楷書潮聲山翠聯句團扇／南宋 范成大 題西塞漁社圖／南宋 趙孟堅 行書梅竹詩譜卷／南宋 佚名 騎驢圖軸／元 耶律楚材 行書送劉滿詩卷／元 趙孟頫 草書即事絶句軸／元 趙孟頫 行書右軍四事卷／元 鮮于樞 草書石鼓歌卷／元 吳鎮 蘆灘釣艇圖卷／元 倪瓚 江渚風林圖軸／明 宋克 草書七律詩卷／明 沈度 書札頁／明 唐寅 致若容書冊頁／明 文徵明 行草書七律詩卷／清 王鐸 書札頁
- viii The Henry Luce Foundation (ヘンリー・ルース財団) <http://www.hluce.org/>
111 West 50th Street, New York, NY 10020 アメリカの芸術分野の奨学金, 高等教育の学際的な検証, アジアと米国の間での理解増進, 宗教・神学研究, 環境と公共政策などの分野の事業を支援する財団。
- ix ハーバード大学芸術図書館 (Fine Arts Library) には, 数多くの拓本が収蔵されており, 現在インターネット上での検索が可能になっている。実際に 2006 年 12 月 21 日 (木), 2007 年 1 月 8 日 (月), 1 月 19 日の 3 回に亘り調査した。これらの拓本は, もとはフォッグ美術館収蔵で, のちに Rubel Collection (ルーベル図書館所蔵品) となり, 現在は Fine Arts Library (芸術図書館) の管轄になっている。中国拓片図録研究員の徐妙玲 (Miao-lin Hsu) さんに拠れば, 青銅器 23 件・玉 1 件の拓本を含め, Fine Arts Library には全部で 1938 件の拓本があり, ほぼデータベース化しており, インターネット上で見ることが可能である。彼女は安田女子大学で開催された「第 5 回書法文化書法教育国際会議」に参加し, 7 月 9 日 (日) 第 3 分科会で, ハーバード大所蔵拓本データベース化について「A Helping Hand on the Web for Chinese Calligraphy Education: Publicizing Chinese Rubbings--Early Calligraphy Online Fine Arts Library, Harvard University Linda Takata and Miao-lin Hsu」と題して発表している。
彼女から, このプレゼンテーションの内容と, ピッツバーグ大学で 4 月に発表したプレゼンテーションの内容 (前者と若干異なる) を CD-R に焼いて, プレゼントしてもらった。帰国後, 大東文化大学の諸氏に是非ともお見せしたい。大東大書道研究所にも【宇野雪村文庫】があり, 拓本類 (冊 500 余冊・整本 1,000 余点) を収蔵しており, 玉村霽山先生が監修されて, 『宇野雪村文庫拓本目録』が出来ている。今後の情報交換や意見交換が楽しみである。何よりも, ハーバード大図書館の, 教育に資すために整理しているという姿勢は, 書道研究所と共通のコンセプトである。是非とも共同研究したいと思う。他にも, 日本では京都大学と淑徳大学, 台湾は中央研究院, 中国は北京大学がそれぞれ拓本の収蔵品を持っており, 大きなネットワークを構築する夢が広がる。
- x Ledderose, Lothar und Schlombs, Adele の共著に “Jenseits der Großen Mauer. Der erste Kaiser von China und seine Terrakotta-Armee (ISBN: 3570053547) がある。

書法の論文を掲載する刊行物には、台北故宮発行の『故宮學術集刊』と『故宮文物月刊』、台湾大学藝術史研究所発行の「藝術史研究集刊」、中華書道学会の機関紙「中華書道」がある。台湾の博士論文と修士論文は論文検索によって調べることができる。

私の紹介は以上だが、遺漏が多いであろうから、参考にとどめてもらいたい。最後にいくつか提案をしておきたい。①欧米と香港・台湾は、収蔵と研究の関係が密接であること。研究者であろうと書家であろうと、公私のコレクション中の書法の資源に注意を払うべきであろうと感じる。②研究の情報提供を良くすること。大陸各地の研究者間の意志の疎通を図るほか、香港・台湾と海外の研究成果とも連絡を取り合う道を築くべきである。学者たちがどのような仕事をしたかを、できる限り理解すべきであろう。欧米のいくつかの定期刊行物は博士論文の選定テーマを掲載し、学内の院生がどのようなテーマがすでに研究されたか、あるいは研究されているかを知ることができる。③中国書法史の研究はまだ年数の浅い学科であり、空白部分が多い。それゆえ、書法の視覚資料と文献を整理、出版して、一時代、一書家の基本的状況を理論的にはっきりさせ、併せてある時代、ある書法の現象、ある書家を通論式に全面的に一般の人々に紹介することである。これは必要であるだけでなく、おそらくこれからずっと長い間、書法研究を組み立てる上での重要な部分であろう。その上、これと平行して背反しない状況のもと、ちょうど欧米のように、より深い研究、学術的特色の専門テーマの研究を提唱すべきであり、専門テーマの研究成果も、時を移さず通論式の著述に吸収されるべきであろう。どうもありがとうございました。

2007年1月19日

ボストンの徹斯徳寓居にて訳出す

-
- i 本稿と関連する文章として、拙文「アメリカの四美術館の書跡調査」（大東文化大学書道研究所編「大東書道研究14」2007年3月発行掲載）がある。なお2006年11月8日から12日まで、ボストンから香港を経由してマカオへ飛び、マカオ芸術博物館主催『乾坤清氣—故宮上博珍藏青藤白陽書画學術研討会』に参加し、研究発表「徐渭的書法審美」（中国語）を行った。また2007年3月16日・17日に、香港中文大学藝術系与文物館主催の『書海觀瀾II—帖学与对聯書法研討会』に参加し、研究発表「“形”與“心”—以王獻之書《鴨頭丸帖》來論書跡的變容」（中国語）を行う予定である。
- ii 渡米後に知った、白謙慎教授の講演録以前に、筆者はウォーレン・I・コーエン著／川瀧一穂訳『アメリカが見た東アジア美術』スカイデア出版所収「第六章 東アジア美術史家」により、若干の動向を得ていた。たとえば、
- | | | |
|-----------------|---|---------------|
| カリフォルニア大学バークレー校 | — | ジェームズ・ケーヒル |
| スタンフォード大学 | — | マイケル・サリバン |
| プリンストン大学 | — | ウェン・フォン |
| イエール大学 | — | リチャード・バーンハート |
| ハーバード大学 | — | ジョン・ローゼンフィールド |
- といった布陣の研究者である。ただし現在はその教え子たちが教壇に立っている。
- iii 原題「海外中国書法研究簡介」は、白謙慎教授が2004年7月21日、中国吉林省長春市科技会堂において、吉林省書法家協会及び遼寧省、黒龍江省の同道に対し、中国大陸以外の書法の研究と創作の状況について行った講演録である。原文全文は、白教授に拠れば、すでに中国の雑誌に掲載されているとのことだが、入手困難なため、白教授の同意を得て、

「大陸の全国規模の書法公募展一覧表」、「大陸の全国規模の三大書法展覧会一覧表」、「大陸の全国規模の書法公募展出品案内一覧表」、「書法刊行物一覧表」である。このような緻密な研究は、長年の資料収集における辛苦な労力をともなう仕事である。翻って大陸を見たとき、どれぐらいの研究者がこのように真面目に現代の台湾書法を研究しているであろうか。制限を受けるという条件の問題があるにせよ、真面目に台湾の同道の学習意識について考えるかどうかは、別の問題である。

台湾の個人コレクターは意気盛んである。コンピューター・ブログの「光達集団」会長の林百里は現在国際的に活躍しており、最も購買力のある中国書画コレクターである。2004年1月、桃園県にある彼のオフィスで、彼が収蔵する宋元書法を見た。なかでも張即之の写経冊は精彩に富み忘れ難い。拙著『傅山の世界』中国語版を出版して頂いた石頭出版社の陳啓徳社長も、多くの素晴らしい古書画を収蔵しており、大型の図録『悦目』を出版している。陳社長の出版社は書画研究の学術書を数多く出版しており、最近出版した『中国書法巨匠叢書』は印刷が非常に精美である。台南の企業家、石允文は数千幅におよぶ海上派の書画家作品を収蔵しており、現在のところ十九世紀から二十世紀初頭にかけての中国書画収蔵における、最も重要な個人コレクターの一人である。私は呉大激を研究しているので、彼を訪ねてそのコレクションを研究させてもらった。台北の何国慶は清初と清末から五四時期にかけての名人書法を専門に収蔵するコレクターで、信札がとりわけ多く、彼のコレクションは大陸で展示されたことがある。彼が創建した「何創時書法文教基金会」は、現在兩岸〔大陸と台湾〕で唯一の、専門に書法研究を応援する基金会であり、1999年に大陸の滄浪書社が蘇州で開催した「《蘭亭序》国際研討会」を援助して頂き、また叢文俊の学術研究を援助している。

公立の博物館では台北故宮博物院と歴史博物館が最も重要である。故宮所蔵の中国古代法書の巨跡は、私がここで一々紹介する必要も無かろう。書画処の何伝馨と故宮から政治に転じた朱惠良女士は、ともに書法研究を主とする学者である。総合的な展覧会と書画展のほか、故宮書画処では近年、董其昌、王寵、雲間書派など専門テーマの展覧会を開催しており、併せて良い図録が出版されている。

台湾の民間書法団体も絶えず書法学術研討会を開催している。「中華書道学会」は2004年十月末に懷素《自叙帖》に関する研討会を開催し、「書法教育学会」は九十年代初頭以来、毎年書法博士・修士論文の研討会を開催している。これらの学会は常に大陸の学者を台湾に招聘しており、彼らは学術活動に参加している。

1949年、多くの書法家が海を渡って台湾にやって来た。彼らは台湾の書壇においてずっと重要な地位を占めてきた。近年、台湾自体の書法の歴史と現状（日本統治時代の書法を含む）について、ますます重視するようになって来た。主な学者に李郁周と麦風秋らがいる。彼らの仕事の重要な部分は資料の収集であり、口述の歴史を含んでいる。

学術条件から言えば、台湾の院生の条件は大陸よりも良い。大陸から出版される書籍は基本的にみな見ることができるほか、院生たちは日本語と英語の学術著書を読むことができる。現在の大陸の博士生と修士生は入学前と入学後に、外国語修得のために多くの時間を費やしている。博士生は第二年次に研究テーマについての報告文を書かねばならず、論文テーマの選択や論文を真剣に書く時間がとても短い。その上、有名な先生方は兼職が非常に多く、真剣に研究と教学にかける時間が極めて少ない。ある大学では、院生がまるで放し飼いのアヒルのようなのである。私がここで提起したいのは、叢文俊教授の指導下にある吉林大学古籍研究所で、すでに大陸における書法の院生を養成する最重要の学術機関になっている。院生の授業選択、論文のテーマ選び、口頭試問などすべて非常に厳格である。叢教授が私に言ったことだが、数名の院生が研究テーマの報告文を否決されたそうである。このようにすれば、院生へのプレッシャーはもとより大きくなるが、プレッシャーをかけないと、正常な教学計画が実現できないことがある。

先ごろ傳申と電話で話したところ、現在大陸の芸術教育の発展速度が速く、多くの学校と研究機関ではすでに書法の博士と修士の養成を開始したが、教授と院生の意思の疎通が不十分のため、学位論文のテーマ選びの時に重複するのではないかと、彼の院生がとても心配していると言う。実際のところ、台湾の学者の大陸の学術に対する認知度は、大陸の学者の台湾の学術に対する理解度を大きく上まっている。また叢先生と話したところ、大陸の学者たちは真面目に台湾学者の学術成果に注意を払うべきであり、連携のパイプを構築すべきであり、博士生と修士生の学位論文を交換して相互理解を深めるべきであると言う。これは単に意思疎通の問題であるだけでなく、良い意味での競争でもあり、情報の交流を通じて、指導教授たちと院生たちがみな、現時点で誰の教育がもっとも水準が高いかが分かるものである。

以上は台湾大学を中心に述べた。台湾には師範大学、文化大学、政治大学など多くの大学にも書法研究の論文があるものの、書法を重視する学者は多くない。たとえば政治大学の林麗娥教授は、長期に亘って大陸の現代書法の状況に注目し、何度も大陸各地で調査を行い、資料を収集して、『大陸文革後二十年書法芸術活動之研究（1977－1997）』を書いた。全457頁で、収録した資料は多く、書法と関連する芸術現象、社会現象について、全面的に記述し分析している。文中に台湾書法界と学術界に何を提供することができるかを専門的に論じた参考意見の部分がある。たとえば、林教授は大陸のいくつかの学術会議では、特別依頼と一般募集の方法を採用しており、台湾の参考となると考えるというもの（239頁）。書物には六つの一覧表が付されている。「大陸の書法団体一覧表」（一般の書法団体451件、これは香港の5件を含む。教育の団体45件、硬筆団体98件、篆刻団体308件、理論の団体7件、総合の団体179件。ある団体には責任者の姓名、人数と出版物を記す）、「大陸の書法研究会一覧表」、

分けて、書法研究の状況を紹介するものである。章節ごとに概観、研究史概要、資料解説の三項目がある。後の二項目はとても重要で、研究史概要は我々学者がすでにどのような仕事をしてきたかを、資料解説は何が基本的資料かを物語るものである。本書の対象が大学生であることから、資料解説は簡略であり、もし深く研究するならば不十分ではあるが、良き入門書であることに間違いない。日本の学者は論文、専門書の出版索引を編集することを好むので、彼らは大陸、台湾、欧米の研究状況について熟知している。本書はこの点を反映している。また杉村邦彦主編の雑誌『書論』も、書学研究の領域において非常に重要であり、有名な専門的刊行物である。

香港の書法研究は、一世代上の学者に饒宗頤が居り、それ以外に中年の学者に李潤桓と莫家良らが居る。〔饒宗頤、李潤桓、莫家良ともに香港中文大学教授である。〕彼らは現在、中国古代の刻帖の研究をしており、重要で大きな学術項目である。莫家良はオックスフォード大学で博士を取得し、宋元書法について深く研究しており、目下数名の書法の博士と修士の院生を指導している。

台湾の数校の大学における、中文系〔中国文学科〕の博士・修士の院生の、書法をテーマとする学位論文には、すでに長い歴史がある。注目すべきは、台湾大学の芸術史研究所〔芸術史研究科〕である。この研究科は八十年代末に成立し、現在四名の専任教授が居り、古代器物、陶器史、書法史、絵画史を担当している。さらに学外の兼職教授も居り、教員のレベルが高い。加えて台北故宮の参観も便利で、個人コレクターも研究者に対しては開放的であり、研究の条件が非常に優れている。大多数の学生は英語力があり、何人かは日本語の読解能力も持っており、海外の漢学と芸術史研究の成果を相当に理解している。九十年代半ば、傅申が台湾に戻り、芸術史研究科に着任した。彼の高い名声により、芸術史研究科の多くの院生が書法を学位論文のテーマに選び、かつ総体的に水準がそろっている。最近私は傅申が指導した二篇の修士論文を読んだ。一篇は何炎泉「張瑞図の歴史形象と書跡」2003年、一篇は劉洋名の「笄重光（1623～1692）および京口地区の収蔵と書風研究」2004年である。この二篇の論文はともに良く書けている。資料を網羅的に収集し（原典資料および学者の既発表と未発表の研究成果）、分析も緻密である。たとえば劉洋名の論文には、笄重光および清初京口と揚州地区におけるコレクターの書法収蔵に関する数点の表が付されている。これらの表中の資料は、すべて大量の書画著録、展覧会図録、オークション図録などから集めて出来たものである。多くの古代書法作品は、誰の収蔵品か明記されていないので、論文を書く人は題跋や収蔵印から探し出す必要がある。芸術史研究科修士課程の学習年限は最低三年だが、多くの院生が三年では論文が完成せず、常に四年かかっている。これは訓練における絶対時間数である。彼らの論文は大陸人がよく口にする言葉、「含金量高〔黄金の含有率が高い：水準が非常に高い〕」であると言えよう。

的な活動は多くない。

アメリカでは小中規模の書法展が多く、最も早い中国現代書法展は、1990年に私が当時留学していたロゴス大学と大学人が共催した「当代中国書法篆刻展」である。1998年、コロンビア大学で学んでいた張以国が「当代中国書法展」を開催し、図録も出版した。1992年、私がエール大学美術館で西洋初の「中国篆刻展」を主催した。翌年、郭継生がニューヨークの「華美葉進社」主催の篆刻展を開き、図録を出版し、「篆刻研討会」を開いた。

華人書家やその子孫の書家がアメリカの書家といっしょに開催した展覧会がいくつかある。たとえば書法を愛好し創作する、アメリカ人の友人二人の展覧会がある。一人はバージニア州リッチモンド大学でアジア芸術を教える Stephen Addiss 教授である。彼の専門は日本芸術で、中国の文人スタイルの生活を好み、日中の書法を蒐集している。さらに陶磁器を作り、書法を書き、蘭竹を画き、印を刻し、作品に味わいがある。彼は何度も書画展を開催している。もう一人の友人 Ian Boyden (薄英) は、いまワシントン州ホイットマン・カレッジ (Whitman College) 美術館の主任である。Ian Boyden はエール大学で中国芸術史修士を取得し、中国に留学し、華人徳に師事した。彼は書法、篆刻、絵画が好きであり、さらに碑を刻し、拓本を取ることが好きで、芸術的感性が良いので、作品には中身がある。彼が将来中国で個展を開催し、国内の同道に彼の試みを観てもらいたいと願っている。このようなアメリカの文人は何人か居るであろうが、統計を取ることはできない。

(4) 漢字文化圏におけるいくつかの研究情況

中国大陸以外では、日本が書法の重鎮である。総人口に占める書法を練習する人の割合は中国よりも高い。近年では日中両国の書家や学者が相互に訪問することにより、日本の書壇の状況を大部理解できるようになってきた。私はこの点については口を挟まない。言いたいのは創作面で、二十世紀以来のアジア漢字文化圏における漢字書法の創作水準を評価するならば、大変考慮すべき範囲にあるということである。たとえば大陸の何人かは新しいものを作り出したと思っているが、観念上まったくオリジナル性を備えていない。なぜならば日本の数名の書家がすでに試みており、おそらく彼らの方がより素晴らしいものである。行書と草書では、我々が虚心に学ぶべき、真剣にお手本とすべき日本の書法がたくさんある。学術研究では、日本の学者の学術態度は総じて非常に謹厳であり、かつ漢学研究の長い歴史があり、人数が多く、重要な学術成果も多い。彼らの学術研究成果を、今日まで中国大陸の学者が熟知し、利用することができないことは、非常に残念なことである。日本の学者は、資料に対する仕事を極めて重視しており、彼らは中国の研究や出版情況の収集に尽力し、時には出版し、学界に情報提供を行っている。私の手元に日本の中国書法史の権威、杉村邦彦主編『中国書法史を学ぶ人のために』〔世界思想社 2002〕があるが、この書籍は時代別と分野別に

上述の博士論文と書籍から容易に見出せるのは、西洋には学術機構があり、専門的研究を奨励している点である。学術的な特徴と精神を有する論文と専門書は、カレッジの専任教員になる審査制度において重要な要素である。比較して言えば、他人の研究成果をまとめた教科書や、用意周到で、穏当で、独創性が無い通論的なものは評価が低い。このような体制は疑い無く、独創性のある専門的研究に従事する学者を奨励するものである。よって、西洋では中国書法史の研究に従事する人士が多くないものの、概論式の著書が占める比率は大きくない。

(3) アメリカの中国書法創作情況

中国書法の創作は、アメリカではおのずと中国人が主である。各大都市の唐人街（チャイナタウン）にはすべて何人かの書家が居る。中米関係が正常化する前の、アメリカ在住の中国人書家では、1949年以前にアメリカに移住した一世代上の華人、たとえば張充和、王方宇などが居る。また五十年代から七十年代にかけて、台湾からアメリカに移住した者に、傅申の先生であるニューヨーク在住の張隆延が居る。彼は南京の人で、胡小石に就いて学書し、書法も胡小石の風格に追随する。1949年に台湾に行き、その後アメリカに渡った。張充和は長期間、エール大学美術学院教授として中国書法を教えた。沈尹默の弟子で、1949年にご主人のドイツ人学者、傅漢思に随ってアメリカに移住した。張充和は隸楷行草にみな長じ、とりわけ小楷は清雅絶俗で極めて得難い。今年、私は北京と蘇州で彼女の書画展を挙行し、非常に評判が良かった。

中米関係の正常化後、より正確に言えば八十年代以後、多くの大陸の書家が日本、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカへ移住した。その中では上海の移民がかなり多く、たとえばもと陳巨来の学生の徐雲叔（今は香港で生活する）、篆刻家の呉子建などがいる。八十年代初め、中国共産主義青年団中央と全国学生聯合は「全国大学生書法公募展」を開催した。その受賞者の多くが、現在みな中国書壇の重要な人物である。この公募展に参加しかつ受賞した者で、現在アメリカに居るのは天津医学院の崔寒柏と私である。その他、書法を得意とし愛好する者は少なくない。私はボストンのチャイナタウンで六、七十歳の書家の作品を見たことがあるが、上手に書いていた。老先生は中国の汕頭の出身で、特に名声があるわけではないが、多くの名家よりも上手である。このことは各地に有能な人物が居ることを表している。

アメリカ各地にはいくつかの華人の書法組織があり、なかでも華人が多く住む場所、たとえばニューヨーク、ロサンジェルスなどの地にある。ニューヨークには「美洲中華書法学会」があり、一世代上の華人書家が多く、ワシントンDCには「中国書法観摩会」があり、ロサンジェルスには「蘭亭筆会」がある。私が住むボストンにも書法の組織がある。しかし統一

Amy McNair 「中国書法風格中の政治性：顔真卿と宋代文人」 シカゴ大 1989
朱惠良 「鍾繇伝統：宋代書法発展中の一つの鍵」 プリンストン大 1990
Adriana G. Proser 「道德の象徴：漢代中国の書法と官吏」 コロンビア大 1995
白謙慎 「傅山と十七世紀中国書法の変遷」 エール大 1996
王柏華 「蘇軾の書法芸術と《寒食帖》」 コロンビア大 1997
Alan Gordon Atkinson 「王鐸の芸術と生涯」 カンザス大 1997
張以国 「王鐸草書線條の意義」 コロンビア大 2001
盧慧紋 「新しい皇朝書風：北魏洛陽地区石刻書法研究」 プリンストン大 2003

さらに数本の博士論文は書法を専門に論じたわけではないが、それらの研究対象は中国書法史上の重要な地位にあたり、影響を及ぼした人物であったりするので、書法史研究にとっても価値がある。たとえば金紅男「周亮工およびその《読画録》—十七世紀中国の支持者、批評家と画家」（エール大 1985）と、李慧聞（Celia Carrington Riely）〈董其昌の生涯（1555—1636）：政治と芸術の相互影響〉（ハーバード大 1995）などがそれである。アメリカの多くの博士論文は出版社から出版されず（この点はドイツと異なる）、もし研究成果を利用したければ、ミシガン大学博士論文コピーセンターから郵便で購入することができる。これは学術界にとって非常に便利なものである。

九十年代後半より、アメリカでは三冊の中国書法に関する専門書が出版された。

Peter C. Sturman（石慢）『米芾：北宋の書法風格と芸術』エール大学出版社 1997
Amy McNair 『心正筆正：顔真卿書法と宋代文人政治』ハワイ大学出版社 1998
白謙慎 『傅山の世界：十七世紀中国書法の変遷』ハーバード大学アジアセンター 2003

私の本はすでに中文に訳され、2004年12月台北石頭出版社から出版された。簡体字版もおそらく来年末に三聯書店から出版されよう〔2006年4月既刊〕。コロンビア大学のRobert E. Harrist, Jr. 教授が中国の摩崖書法に関する専門書を執筆中で、『閲読山巒』と題する予定と聞く。

概説書では、早期に蔣彝〔Chiang Yee〕の“Chinese Calligraphy”（初版はイギリスで出版、修訂本が1973年にハーバード大から出版）がある。本書は通俗的だが、文章が流暢で生き生きとしており、今日まで依然として多くのカレッジが中国書法の授業の基本的なテキストとして使っている。近年、ニューヨーク在住の張隆延とその弟子Peter Millerが、『中国書法四千年』（シカゴ大学出版社1990）を共著で出版した。またハワイ在住の曾佑和女士は1993年に『中国書法史』（香港中文大学出版社）を出版している。

は、欧米において今なお、書法研究者、コレクターの重要な参考文献とされている。展覧会と同時に、西洋初の中国書法學術研討会が開催され、芸術史学界の書法研究に対する重要さを高めた。1999年3月、プリンストン大学美術館で「エリオット・コレクション中国書法展:The Embodied Image」が挙行政され、併せてRobert E. Harrist, Jr. (韓文彬), 方聞 (Wen. C. Fong) など多くの学者が執筆した450頁に及ぶ大型の研究図録, “The Embodied Image: Chinese Calligraphy from the John B. Elliott Collection” が出版された。論文として「中国書法の理論と実践」, 「王羲之と中国書法文化」, 「書法と宗教」, 「明代蘇州地区の書法」, 「晩明書法中の奇」, 「中国尺牘の私人性と公衆性」, 「中国書法と建築」などを収録する。「エリオット・コレクション中国書法展」の開幕時に、中国書法史討論会が開かれ、討論会論文集も出版した。このような研究型の図録は、目下の大陸では数少ない。今後大陸では欧米(および香港・台湾と日本)の経験を手本にして、書法を専門テーマとする展覧会を企画し、併せて研究図録を出版すれば、博物館のコレクションと研究成果を対外に披露することができよう。

博士論文〔Ph. D.〕は、アメリカにおける中国書法を専門の研究テーマとする、主たる著述方式である。目下、書法に関する博士論文をすでに完成した者は、プリンストン大学が最多である。プリンストン大学は中国書法研究の重鎮である、方聞教授と切り離すことができない。プリンストン大学芸術史系の方聞教授は、清末の著名な書法家、李瑞清の甥、李健の入室の弟子であり、中国書法史にずっと興味を持っておられた。六十年代より、方聞はプリンストン大学教授として、アメリカにおける中国書法の研究を積極的に推し進めて来られた。プリンストン大学の中国書法関係のコレクション(個人寄贈を含む)は、全世界の大学美術館中屈指のものであり、それゆえプリンストン大学の中国書法の研究は、開始時から原作を非常に重視する。残念なのは、方聞が数年前に退休されてから、彼の後を継ぐ教授が書法に対して関心を持ってはいるものの、専門家では無いことである。今後プリンストン大学中国芸術史の専門は、過去のように中国書法をテーマとする博士を養成することが難しいであろう。とは言え安心できるのは、方教授の学生で、目下コロンビア大学で教鞭を執るRobert E. Harrist, Jr. (韓文彬)教授が、書法に対して非常に関心を持っており、彼の二人の学生が書法をテーマとする博士論文を書いていることである。

七十年代以来、アメリカで博士論文を完成した者は次の通りである。

傅申「黄庭堅の書法と贈張大同卷」プリンストン大 1976

Christian F. Murck「祝允明と蘇州地区の文化の承諾」プリンストン大 1978

Steve J. Goldberg「初唐の宮廷書法」ミシガン大 1981

王妙蓮「鮮于枢の書法と1299年書〈御史箴〉卷」プリンストン大 1983

の別本（一般には上海博物館蔵を真跡とする）があった。その他では、中国の拓本を最も多く収蔵するシカゴのフィールド博物館（The Field Museum）がある。ハーバード大学などの重要な大学にも大量の拓本が収蔵されているが、多くは目録などが整理されておらず、使用に不便である¹³。アメリカの大きな図書館、たとえば国会図書館、ハーバード大学燕京図書館、カリフォルニア大学バークレー校図書館などには、中国の印譜が収蔵されている。

アメリカは欧米のコレクションと中国古代絵画研究の重鎮であり、多くの古代絵画の後部には題跋があり、大量の古代書法の資料を留めている。書法史を研究する学者は重視すべきであろう。

(2) 欧米における中国書法の研究情況

ヨーロッパにおける中国書法の研究は、ドイツが重鎮である。ハイデルベルク大学のローター・レタローゼ（Lothar Ledderose, 雷徳侯）教授が中国書法をずっと重視している。彼の博士論文は『清代の篆書』であり、重要な著作に『米芾と中国書法の古典伝統』がある。そのほか中国書法を論述した文章が数篇あり、そのうち二篇は中国語に訳されている。ベルリン東方博物館〔ケルン東洋美術館〕のAdele Schlombs館長の博士論文は『懷素と中国書法中の狂草の誕生』である（ドイツの博士論文は一般的にみな出版する）¹⁴。数年前、台湾の戴麗卿さんが、ドイツで于右任の書法をテーマとした博士論文を完成させている。フランスでは、中国人学者、熊秉明の草聖張旭に関する仏文の専門書がある。彼の中文著書『中国書法理論体系』は、伝統の書論を分類して体系化した仕事であり、加えて文章が優美であるので、八十年代の美学ブーム、文化ブーム真最中の中国書学界にぴったりと一致し、発表後、大陸の書学界から非常に歓迎された。スイスの学者 Jean Francois Billeter の英文著書『中国の書写芸術』は、中国書法芸術を紹介する時に、西洋芸術を参照しており、かつ生き生きとした文章なので、西洋の読者に適した書籍である。

欧米における中国書法の研究では、アメリカが最も活発であり、七十年代以来、多くの中国書法の展覧会があり、近年では中国書法を研究する学者の数も増えている。展覧会の図録は、欧米の芸術史界における重要な著述方式の一つであり、その長所は新しい学術成果を比較的早く反映することができる点（アメリカの大学出版社は審査と学術著書の出版に時間が掛かる）、未発表の芸術作品を発表することができる点、そして展覧期間中に出版されるので、大衆の関心を容易に引きつけることができる点にある。1971年、曾佑和女士はフィラデルフィアで、欧米初の大規模な中国書法展を開催し、同時に図録『中国書法』を出版し、西洋に向けて全面的に中国書法を紹介した。1977年、当時エール大学芸術史系で教鞭を執っていた傅申は「“筆有千秋業”書法展」を主催した。この展覧会は曾女士の展覧会に比べて研究性を具えており、その図録“Traces of the brush: Studies in Chinese Calligraphy”

所蔵した八大山人の画作のうち、最も精華な作品をフリーア美術館に寄贈し、書法もフリーア美術館が購入して所蔵している。

王南屏は1924年に読書人の名家に生まれ、上海で育った。十六歳で無錫国専に入学して哲学を勉強し、二年後、上海復旦大学に転じて国文〔中文〕を学ぶ。二十歳で無錫国専と復旦大学の学位を同時に取得。大学での勉強中、王南屏は著名な書法家、鑑賞家である葉恭綽の指導のもと、書画の収集を開始し、大コレクター龐萊臣の教えも受けた。1949年以後、王南屏は香港に移住し、続けて中国書画を収集し、香港で最も重要なコレクターグループ「敏求精舍」のメンバーとなった。王南屏は晩年アメリカに定住し、1985年に逝去された。王南屏の書齋の号は玉斎である。玉斎収蔵の書法には、中国書法史上極めて重要な作品が少なくない。もと玉斎収蔵の書法の精品で、現在中国大陸や海外の重要な博物館の収蔵となっているものも少なくない。王安石書《楞嚴經卷》、米芾書《向太后挽詞》などがそれである。コレクションの数量が最も多いのは明清書法である。近年、王南屏の子女がすでにコレクションの一部を移譲したが、まだ手中に一部が残っている。彼の息子は私が教えるボストン大学から遠くない所に住んでおり、時々大学院生を連れてコレクションを鑑賞させてもらっている。これも教学内容の一つである。

近年かなり活発な華人コレクターに、アメリカ東部ニュージャージー州に住む林秀懐が居る。林秀懐は香港人で、現在はアメリカで自動車貿易の仕事をしている。彼本人は書画が大好きで、コレクションには明清書法の精品が少なくない。特に宋克書の抄録《蘭亭十三跋》は、美しい高麗箋に書かれており、とても素晴らしいものである。林秀懐は現在のアメリカ華人中の重要なコレクターであるだけでなく、中国芸術研究の重要な支持者であり、中国芸術の展覧会や学術討論会につねに賛助しておられる。

以上述べたのは、すべて個人コレクターである。すでに触れたように、何人かの個人コレクターは自分のコレクションを美術館に寄贈している。現在、中国書法を多く収蔵する美術館としては、ニューヨークメトロポリタン美術館、プリンストン大学美術館、フリーア美術館がある。フリーア美術館は是非紹介しておきたい。フリーア美術館はフリーア氏が1920年代に寄贈したものだが、現在はアメリカ国立のアジア芸術博物館である。1979年に傅申が中国芸術部主任に就任してから、系統的に中国書法を収蔵し始めた。九十年代中葉に傅申がフリーア美術館を去った後、後継者の張子寧も非常に書法を重視し、彼の努力のもと、フリーア美術館は前後して、王方宇収蔵の八大山人書法の寄贈と、エルスワース寄贈の中国近現代書法を勝ち取った。ほかにもいくつかの印章を収集している。

アメリカの他の美術館にも、多少の中国書法が収蔵されている。数年前、私はカンザス・シティーのネルソン・アトキンス美術館を参観し、アジア部主任の楊曉能から、葉公超の子孫が寄贈した書法作品を見せてもらった。なかに伝褚遂良《大字陰符經》と米芾《多景楼詩》

たとえば中国国内で紹介したことのある、エール大学で長期にわたり書法を教えて来られた張充和女士は、晩清の高官、張樹声の子孫で、彼女の家には数は多くないが古い書画がある。もとプリンストン博物館勤務の劉先女士は、清代の著名な蔵書家、貴池の劉世珩の子孫であり、その母方の伯父は沈曾植で、家には沈曾植の作品がある。とはいえ、著名な一世代上の華人コレクターとなると、翁萬戈、王季遷、王方宇、王南屏である。

翁萬戈は翁同龢の五代の孫であり、アメリカでも著名な華人の社会活動家である。八十年代には中米文化を積極的に推進した「華美葉進社 (China Institute in America)」の主席に任じた。翁萬戈は1936年に上海交通大学の電機エンジニアリング科に入学。翌年、日中戦争が爆発し、上海が占領された。学業を成就させるため、翁萬戈は1938年にアメリカに渡り、エンジニアリングで有名なパデュー大学 [Purdue University] に留学し、エンジニアリング学士と修士を修得した。四十年代初めから、翁萬戈は西洋に向けて中国文化を紹介する事業を始め、爾来数十年間、翁萬戈は一人で数十本の教育映画と記録映画の撮影に参加して制作し、西洋に向けて中国の悠久な歴史と燦然と輝く文化を紹介した。そのうちの一本『中国佛教』(1972制作)は、1973年のアトランタ国際映画祭で金賞を受賞している。

翁萬戈の書画コレクションは、基本的に翁同龢旧蔵である。なかでも書画、碑帖のコレクションは数量が多く、精品も多い。「芸苑掇英」第三十四期(1987年1月)はその精華を選び紹介した特集である。書法では、唐開元年間精写本《靈飛六甲經》(世に「《靈飛經》四十三行本」と呼ばれる)が、翁氏家蔵の書法中、年代が最も古い精品の一つである(すでにニューヨークメトロポリタン美術館に委譲)。この作品は晩明に発見された後、石に模刻され、その後清代にさらに何度も翻刻された、清代の小楷書法に対して影響の大きいものである。この翁氏蔵「四十三行本」は、これら拓本の祖本となる墨跡であり、唐人写經のなかでも精美と称され、唐代の写經を研究し、墨跡と拓本の関係を研究する上で重要な価値をもっている。その他には文徵明一家書卷、董其昌の書法、黄道周の書札卷など明清名人書法がある。翁同龢自身もまた晩清の重要な書家であり、翁萬戈が所蔵する翁同龢の墨跡がたくさんあり、さらに翁同龢自用印が約四十余方ある。翁萬戈所蔵の印章には清末の著名な篆刻家(吳昌碩、金城、王冰鉄など)の刻印が多く、印石も非常に美しいものである。

王方宇は1936年に輔仁大学教育学科を卒業した。1944年に渡米し、1946年にコロンビア大学修士を修得。前後してエール大学とウエストイースト大学で教え、ウエストイースト大学アジア学科主任を務めた。彼の学術面での成果は、主に漢語の教学と八大山人の研究である。王方宇も海内外に影響を持ったコレクターである。彼は五十年代から張大千の手にあった一群の八大山人の作品を獲得して後、ずっと八大山人の書画の収蔵に専心した。彼の収蔵品で最も重要なのは数十件の八大山人作品であり、なかには数件の重要な八大山人の書法が含まれる。王方宇が逝去された後、その子の王少方は父親の遺志にもとづき、王方宇が生前

書法のコレクションでは、碑帖が最も重要である。文物出版社から『安思遠藏善本碑帖選』が出版されている。そのうち『淳化閣帖』はすでに上海博物館が購入して収蔵した。エルスワースはさらに敦煌写経巻本を所蔵しており、非常に貴重な文献である。彼は以前、近現代の名人の書法を数多く持っていたが、数年前すべてワシントンのフリーア美術館に寄贈した。

もう一人中国書法に非常に興味を持っているコレクターは、ニューヨーク在住のクリストファー・ルース (Christopher H. Luce) である。クリストファーは現在ヘンリー・ルース財団^{viii}の理事長である。彼の祖父はアメリカ新聞界の大御所、ヘンリー・ルース (Henry Luce, 1898 - 1967) である。ヘンリー・ルースは宣教師の子で、中国山東の蓬萊で生まれ、烟台で小学教育を受けた後、アメリカに返り、中学、大学を卒業した後、「タイム社」を創設した。この会社は週間「タイム誌」と週間「ライフ誌」など有名な多くの雑誌を出版し、あわせてヘンリー・ルース財団を創設した。クリストファーの中国情趣の淵源はその家庭にある。彼は1978年から中国と日本書画の収蔵を開始した。中国古代書法のコレクションでは、最も古いのは元代だが、数量的には明清書法が一番多く、呉門派の文徵明、唐寅、陳淳、文彭、王問、周天球および晩明の董其昌と陳繼儒などの作品がある。

ここで非常に特色のあるコレクションについて紹介しよう。それはバージニア州の観鷺園のコレクションである。園主は非常に修養のあるアメリカ人ご夫妻である。観鷺園のコレクションは、少数の西洋の芸術品と早期の中国器物を除き、主に十七世紀の中国芸術品である。収蔵品は版画、印章、書画、磁器などで、数が多くまた広範囲に及んでおり、なかでも書画と磁器が素晴らしい。書画では董其昌、米万鍾、黄道周、王鐸、蕭雲從、周亮工、龔賢などの作品があり、特に周亮工という清初の文人とその周辺の収蔵がある。周亮工は清初の文壇において極めて影響力があった人物で、周亮工と同時代の河北の学者の申涵光は、生涯に青海原を見なかったことと周亮工と面識を得る縁がなかったことが残念であると言っている。周の当時の名声の一斑が窺えよう。周亮工の『読画録』や『印人伝』などの著作は、今日においても芸術史を修める学者に重視されている。園主は周亮工本人の書法作品を収蔵するほか、周亮工と関係するいろいろな芸術品も収蔵している。たとえば周の友人の胡玉昆の絵画、張大風の書法、胡正言が刊行した著作などである。これらは周亮工と十七世紀の南京の文化芸術圏を研究する上で、重要な意義を有している。観鷺園が収蔵する磁器は“転型器”と呼ばれるもので、十七世紀に景德鎮で生産された磁器の一種である。この磁器には常に多くの文字があり、これまた十七世紀書法を研究する資料である。

以上述べたのは、すべてアメリカの大コレクターである。さらに多くの小コレクターが居り、ここでは一人ひとり列挙し得ない。アメリカにはまた多くの華僑のコレクターが居る。一世代上の華人は、その多くが四十年代または五十年代初めにアメリカに渡ってきた。なかには少なからず名家の出身者が居り、多かれ少なかれ彼らの家にはコレクションがある。た

イギリスの駐中外交官 Gordon Barrass は、中国書法が好きで、中国での任期中、多くの現代書家を訪ね、多くの現代書法作品を収集した。二年前、彼はその作品を大英博物館に寄贈し、「当代中国書法展覧」を挙げて、280 ページ、カラー版展覧図録を出版した^{vi}。会期中、学術討論会も開催した。中国の数名の前衛書法家や評論家、たとえば王南溟、張強らが会議に参加した。

アメリカのコレクターは初め、ヨーロッパと同様で、古くに収蔵した中国芸術品は磁器、漆器、青銅器などの器物である。中国絵画に対する関心も書法よりはるかに早い。しかし五十年代から、コレクターが意識的に中国書法を収蔵するようになった。現在はアメリカの中国書法の個人コレクターがとても活発である。アメリカの中国書法コレクションにおける最も早い大コレクターは、ジョン・クロフォード (John Crawford, 顧洛阜, 書齋名は漢光閣) である。クロフォードはディーラー〔文物を取り扱う商人〕で、彼は五十年代、多くの重要な中国書法作品を購入した。黄庭堅の草書手巻《廉頗与藺相如伝》、米芾の重要な初期作品《吳江舟中詩》、および耶律楚材の《詩卷》などである。そのほか宋人の扇面も所蔵し、なかには書法の扇面がある。また明人の董其昌、張瑞図、王鐸の作品などもある。彼の遺志により、これらの作品はすべてニューヨークのメトロポリタン美術館に寄贈され、当該美術館の中国書法コレクションの中核となっている。^{vii}

個人コレクターのなかでは、エリオット (John Elliott) のコレクションが最も多くかつ素晴らしい。エリオットはアメリカの名門の生まれで、金融業、証券取引が本業である。エリオットは若い時にプリンストン大学を卒業し、中世史を専攻した。在学期間中、中央アジア史、アラビア語、中国芸術史などの科目を選択した。エリオットは芸術をこよなく愛し、中国、日本、アフリカ、南アメリカの芸術品と、ヨーロッパ早期の鉄器を収蔵した。彼のコレクションでは、中国芸術が最も有名である。数十年の努力によって、エリオットはアジア以外では屈指の中国書画コレクターになった。百件近い彼の中国書法コレクションは（大きな装丁で十箱帙入りの《明清人信札》数百通があるが、数件として数える）、輝かしい名跡ぞろいである。欧米で唯一の唐模本王羲之《行穰帖》から、黄庭堅行書《贈張大同卷》、米芾三札《留簡》・《歳豊》・《逃暑》、趙孟頫楷書《妙巖寺記》などがある。さらに明清書法の精品も数多い。エリオットは生前、これらの芸術品を基本的にすべてプリンストン大学美術館に寄贈した。当該美術館はつねにこれらの芸術品を展示し、学者と書法愛好家たちに研究と鑑賞の機会を与えている。エリオットに遺志により、彼が収蔵した書画はすべて母校のプリンストン大学に寄贈された。

エルスワース (Robert Ellsworth, 安思遠) は中国文物界でよく知られた名前である。彼はニューヨーク在住のコレクター兼ディーラーで、欧米の文物界に大きな影響力をもち、中国文物界とも関係が深い。彼の主たるコレクションは中国器物だが、中国書画も有している。

河内がアメリカ国内の情報を収集する上で、よきガイドラインとなった書籍ⁱⁱと講演録ⁱⁱⁱがある。後者は渡米後に知ったものだが、客員研究員として受け入れて下さったボストン大学白謙慎教授 (BOSTON UNIVERSITY Associate Professor) の、中国吉林省長春市における講演録「海外における中国書法研究の簡単な紹介」(2004年7月21日)である。

この講演は、(1) 欧米における中国書法の収蔵情況、(2) 欧米における中国書法の研究情況、(3) アメリカの中国書法創作情況、(4) 漢字文化圏におけるいくつかの研究情況、の四節からなり、決して標題にあるような簡単な紹介ではなく、白教授が1986年に渡米されてから2004年までの、研究と教学上の学術視点と情報とが集約されているものであり、アメリカのみならずヨーロッパから中国・台湾・日本における、重要な美術館・博物館、大学などの研究機関、学者、大学教授、研究者、個人コレクター、キュレーター、鑑定家、書家などの人物、書跡、論文、著書、定期刊行物、展覧会とその図録などの出版物、そして大学教育のありかたなど、ありとあらゆる動向が網羅されているため、河内が設定した上記三項目全てに絡む内容を有している。

よって「西洋の視座から見る〈書〉への基礎的調査」の研究成果の一部として、ここにこの講演録の全訳を掲載する。なお河内の全体的な研究成果については、帰国後に稿を纏める予定である。

白謙慎教授講演録「海外における中国書法研究の簡単な紹介」

(1) 欧米における中国書法の収蔵情況^{iv}

二十数年前〔1981年〕、傅申は、日本の学者、中田勇次郎と共編した『欧米収蔵中国法書名蹟集』の「序説」^vのなかで、欧米収蔵の中国書法の歴史を簡単に回顧し、「欧米における中国芸術の収蔵と研究は、書法が一番遅れている。それは文字の問題と西洋に対応する芸術がないためである。西洋にも calligraphy という芸術があるが、一般には工芸の一種と見なされており、社会的、文化的地位が低く、芸術成果においても中国書法と同じ次元で論じることができない」と述べている。

ヨーロッパ人が中国書法を収蔵する情況は不明だが、個々に収蔵する者はきっと居るであろう。時にはヨーロッパの、文物のオークション図録で何件かの書法作品を見ることができるが、今日まで大コレクターが居るとは聞いたことがない。しかし、敦煌文書が発見されて後、数名の西洋探検家と学者たちが敦煌に行き、大量の敦煌出土写経巻本を取得した。多くの敦煌写経巻本はその後、博物館と図書館に寄贈された。現在イギリス、フランス、ロシアのいくつかの文化機関に大量の敦煌巻本が所蔵されている。もしこれらの敦煌文書を古代書法作品と見なすならば、その数量は相当なものである。その他、ヨーロッパの博物館が収蔵する殷周時代の青銅器があり、銘文があるものもいくつかあり、これらも書法資料と見なせる。

海外における中国書法研究の簡単な紹介

A Brief Introduction of Studies of Chinese Calligraphy in Overseas

白 謙慎 講演

Qianshen Bai

河内 利治 訳

Toshiharu Kawachi

【解題】

河内は大東文化大学平成18年度長期海外研究員制度に採択され、「西洋の視座から見る〈書〉への基礎的調査：Research on Basic Viewpoint of Calligraphy in the West」を研究テーマとして設定し、アメリカ合衆国の東部マサチューセッツ州ボストン市にある、ボストン大学人文学部芸術史学科客員研究員（BOSTON UNIVERSITY College of Arts and Sciences Department of Art History VISITING RESEARCH SCHOLAR）として、2006（平成18）年4月1日から2007（平成19）年3月31日までの一年間、アメリカ国内を中心に在外研究を行っている。

研究テーマ「西洋の視座から見る〈書〉への基礎的調査」を進めるにあたり、次の三項目の基礎的調査を計画し、実施した。

- 1, アメリカの博物館および美術館などに収蔵される「書跡」の基礎的調査
- 2, アメリカの諸研究機関における書法美学及び芸術学に対する研究の基礎的調査
- 3, アメリカの諸教学研究機関における書道教育の実態に対する基礎的調査

特に1, の項目、すなわちアメリカの博物館および美術館の「書跡」を調査するにあたり、『歐米收藏中国法書名蹟集』全四巻、昭和56年（1981）中央公論社刊（以下『歐米』と略す）を参照した。『歐米』は、1980年以前の欧米における中国書法の名品の図版写真（一部カラー）と解説、および中田勇次郎・傅申両氏の論考からなる。『歐米』出版から25年以上経った現在、果たしてこれらの名品が、そのまま各美術館に収蔵されているのか、また保存状態はどうかなどが、主たる調査目的である。また『歐米』の続篇にあたる『歐米收藏中国法書名蹟集』明清篇二巻が、昭和58年（1983）に同社から刊行されており、同様に随時参照した（以下『歐米』明清篇と略す）。結論から言えば、『歐米』に収載される書跡は、現在も各機関に収蔵されており、基本的に保存状態は良好であった。